



TITLE:

<地球をあるく> 田舎の美

AUTHOR(S):

陳, 慕薇

---

CITATION:

陳, 慕薇. <地球をあるく> 田舎の美. 資本と地域 2015, 9-10: 76-76

ISSUE DATE:

2015-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/198541>

RIGHT:

<地球をあるく>

## 田舎の美

陳慕薇

修士論文の調査をきっかけに、京都府北西部にある福知山市に何度か行っていた。片道2時間かかる京都駅から福知山市までの線路はにぎやかな京都から、すこし閑散とした街に、そして山と川の間に点在する村落、最後に福知山市へと導いている。電車の駅前はすこし居住地が集中しているが、駅と駅の間はジブリのアニメで見かけるような木造の家屋が大自然の中に散らばっている。

延々とした田舎風景をずっと眺めると、「人は物欲を満たすために都市に群れるのであろう」。私はそう思えた。大都市の華やかさに引かれる一方、田舎に就職口がないため、田舎を後にし、大都市に押し寄せてくる若者がたくさんいる。そのために、過疎化が進む市町村が続出している。金銭的競い合いより雲の波立ち、人造ファウンテンよりさらさらと流れるせせらぎ、ちかちかするガラスビルより木造家屋の温もり、そういう選択をするには、田舎の美を見抜くことができる慧眼が要るだけでなく、都市のきらびやかさから離れる勇気も必要である。

田舎の美しさは中国人にとって感じがたいものである。都市化が凄まじく進んでいる中国は中小都市はもちろん、郷鎮も競って大都市の真似をしている。古い街並みを取り壊しコンクリートのビルを建てたり、中心地にショッピングモールモドキのものを作ったり、工業団地が周辺の田んぼを蚕食したり

して、田舎の「立ち遅れ」を一生懸命隠そうとしているが、結局中途半端な街がうみ出された。高度成長で補われる都市開発の問題点はだんだんしっぽがでてきた。いつしか私たちがもつ田舎の印象はただほこりまみれの町とまずしい人たちとしかなくなってきた。大都市に流出した若者のUターン、Iターンが期待されるのはありえない話になっている。

それに対して、日本は田舎の美が残っているところがあるだけでなく、そこに都市の若者が引き付けられている。去年の夏休みに富良野に10日間滞在した。そこで古いコテージを改造して喫茶店を開いた大阪出身の若い夫婦に出会った。都市生活に飽きたご主人が現在毎日ゆったりと過ごす生活に非常に満足している。ご主人が曰く、「大阪には大きなデパートなどの娯楽施設などがあるけど、私たちに必要不可欠なものはそんなに多くない。ここでネット通販もできるし、なによりも大阪に絶対ない自然があり、絶対できない生活ペースができる」。人の欲望は環境により膨張したり、縮小したりする。人の欲望に必要以上に余剰な部分を求めさせるのは都市生活である。「何もない」田舎に移住してきてから、物欲の代わりに精神的に豊かになるそう。ヨーロッパにある芸術村のように、生活の意義を金銭だけで測らずに、視点を変え、ペースを遅らせることにより、メンタルのゆとりを求める若者のUターン、Iターンが近年日本でも見かけるようになった。田舎の美を守り、そしてそれに気づかせることは、発展途上の中国にとって、成熟社会の日本にとっても、田舎の過疎化を止める一策であろう。

(京都大学大学院経済学研究科修士課程)